

## アカデミック・ジャパニーズの聴解

坂本 恵

【キーワード】 聴解、アカデミック・ジャパニーズ、スタンダードズ、独話、  
聞いてわかる

### 0 はじめに

東京外国語大学留学生日本語教育センターで作成した「JLC日本語スタンダードズ」(以下、「スタンダードズ」)はアカデミック・ジャパニーズに特化したものとして作成したものである。その中で、「聞く」については、一人の人が大勢の聴衆に向かって話すタイプの「独話」を対象としており、二人以上のやりとりで構成される会話は「話す聞く」として別に立てられている。アカデミックな日本語を聞く能力としては、最終的なゴールが「講義がわかる」に設定されているが、「講義を聴く」ことができるようにするために、初級、中級段階でもどんな練習をすればよいだろうか、また、「講義がわかる」ということ、「聞いてわかる」というのはどういうことを言うのだろうか。どうしたら、わかったことになるのだろうか。そして、どうしたらわかったことを確認できるのだろうか。これは読解でも同様の疑問であり、特に、アカデミックな目的に特化した中では、理解をどのように考えればよいのか、考える必要があると思われる。アカデミック・ジャパニーズにおける聴解練習とはどのようなことを目指すのか、どのようなことをすればよいのかについて実践を踏まえて考察したい。

### 1 「JLC日本語スタンダードズ」の「聞く」

スタンダードズでは「聞く」能力を独話と会話に分け、「聞く」では独話のみを対象としている。これは、ゴールを講義、研究発表を聞くことにおいていること、「話す」では同様にスピーチ、研究発表ができることを目標にしていることと関連させることから来ている。また、相手があり、その場での対応が必要、そして、その場でのいろいろな修正、対処のできる2者あるいはそれ以上の会話と、一方的に流れてくる音声进行处理することは違った能力、練習が求められると考えたからである。通常は音声はその場でしか聞くことができず、後で戻って聞くことができない。何度も

聞いて内容を確認することは授業内でしかできないことであり、その練習を積むことで、聞く能力が伸ばせると考えている。独話というのは、何かのテーマについて原稿を作って説明する、というタイプのもので、講義、講演、テレビやラジオなどの解説番組のことである。同様のものとして、インタビュー形式や討論形式なども含んで考えるが、あくまでも聴衆に聴かれることを前提とし、準備してあるものを対象とする。具体的には、何かについて解説する内容、調査報告などの作成教材、ニュース形式の教材、生教材としては、ラジオなどのニュース、視覚も含めたビデオ教材としては、テレビのニュース解説、論説番組、実際の講義を聴く準備として作成された5分から30分程度の「ミニ講義」などがあげられる。実際の授業で使用する教材は、中級までの段階ではレベルにあった語彙、文法に制限した教材が中心となり、上級ではそれに加えて、生の教材も使うことが想定されている。

聴解の授業で扱うのは、ただ単にCDなどの音源を聞いたり、ビデオを見ながら聞くという活動だけではない。実際の講義や講演、研究発表を聞く場合には、教科書、配付資料、パワーポイントなどのスライドを見ながら聞くことが多い。また、自分の専門分野であるとか、時事問題であるとか、持っている知識を活用して聞くことが要求される。純粋に「聞く」能力だけを伸ばす練習というより、他の情報や持っている知識などのすべての力を使って聞く練習を行うことを考えている。また、聞いたことが理解できているかを見るために、ノートを取る、要約を作る、内容について述べるなど、他技能も関わる練習となる。スタンダード表では技能別に表が作られているが、日本語能力を伸ばすためには総合的な練習が必要であり、一つの技能だけを伸ばすということではなく、総合的に力をつけるものと考えられる。表はあくまでもその技能から見たもの、見えるものを示しただけであり、実際の練習についても、総合的な訓練の中での一面であると言える。

「スタンダード」「聞く(独話)」では、生教材を使う直前の段階である中級後半の行動目標、スキルを以下のようにしている。ゴールに向かうための力を伸ばす段階であり、スタンダードの聴解の特徴をよく表しているものとしてあげることができる。行動目標：やや専門的な内容の解説、スピーチ(構成のしっかりしたもの)が聞ける  
スキル：明示された意見、評価が理解できる

話の展開を追って聞ける

結論を予想しながら聞ける

話の構成に沿ってメモがとれる

レジユメを見ながら聞ける

理解の修正をしながら聞ける

語の意味を類推しながら聞いたり辞書で調べたりできる

実際の教育では、それぞれのレベルにあった、ナチュラルスピードの独話の聴解教材を用いて、スピードに慣れ、内容をつかみ、細部も聞き取るという一般的な聴解練習を行っているが、スタンダードに準拠した教育としては、話の展開、構成を負うことが重要である。そのために、細部ではなく、全体、あるいは段落ごとのまとまりを見、1語で、あるいは1文でまとめる練習や要約文を作る練習も行っている。聞き取れた内容を大きく上位概念の漢語で表すことは難しく、これらを身につけることも一つの目的である。要約文を作る練習ではどの部分を要約で表すか、詳細にわたる、具体的な説明の多い文をレジюмеに書くような簡潔な一文として表すこと、適切な表現を探し、文法的な誤りのない文を表出させることなどが練習となる。中級段階でも、そのレベルにあったテキストの要約は、ある程度できるようになる。スタンダードに準拠した聴解教育はそのようなものであると考えている。

## 2 何を聞き取るか

「聞く」という場合、何を聞いたなら「聞いてわかる」ということになるのか。授業の中で何を聞かせることを目標にするのか。さらには、わかったかどうかをどのようにして測るのか、ということがあり、そのために教材ではいろいろな質問が考えられていると言える。ここでは、日本語レベル別に、また、聞く教材の種類により、何を聞くかを考えてみたい。

### 2.1 初中級、中級

アカデミック・ジャパニーズを念頭に置いた教育は初級から可能であるが、実際には、ほぼ初級文型を習得し、漢字語彙が増えてくる初級最終段階、初中級、中級からがアカデミックなテキストを使つての教育の中心となる。この場合、文型、語彙をコントロールした教材を使用することになる。何を聞くかについては、聞くものの種類により異なる。

#### 2.1.1 ニュース

中級はじめからニュース形式の教材がいくつか市販されている。また、中級後半からはテーマを選べば、生のニュースも教材として使用できる。ニュースを伝える場合には、5W1Hが必要と言われる。しかし、単なるニュースに出てくる単語を正確に聞き取ることが必要であるとは言えないのではないか。例えば、ニュースの中

に出てくる固有名詞は実際にはそれほど重要でないことが多い。ニュースの中で出てくる人名は、首相などの有名人物であれば別だが、たいていの場合、それがどのような人であるか、どのような立場の人であるかがわかることのほうが重要であることが多い。場所も、だいたいの位置がわかればよく、固有の町名などはそれほど重要とは言えない。これらの固有名詞はデータとしては必要であるが、それが正確に聞き取れなければ聞いたことにはならない、というわけではない。ニュースの場合、重要なことは冒頭に示されているので、その部分をしっかり理解し、その後が続く説明で情報を補う、という構図がわかっていることが大切であろう。ニュースの内容をまとめる際には、固有名詞よりもそれがどのような意味を持つものであるかを受け取ることが重要となる。

### 2.1.2 独話、解説

教材として作られた独話は、たいていが何かについて説明するものとなっている。テレビ、ラジオなどの解説番組を短くしたようなものとも言える。これらは短くても、段落を持ち、導入、本文、まとめ、といった構成ができていくものが多い。このような教材を聞く練習をする際、全体で伝えようとしていることを考えさせる練習、その次の段階として細部を聞き取る練習が重要である。そして、中級段階ではさらに上を目指した教育も可能である。これらの教材を使って、文の構成をつかむ練習をすることができる。文章の構成を理解することはその後、読解にも、スピーチをする際にも、レポート等を書く、その前段階のアウトラインを作る際にも重要なことである。それは、初級から中級、上級へと進むに従い、内容、語彙、思考も具体的なものから抽象的なものへと移っていくことと対応している。文章の構成を考え、具体的な内容を表す抽象度の高い語彙でまとめる、という作業は、アカデミック・ジャパニーズで何より重要なことだと言えよう。具体的なことを抽象的に表現する、また、抽象的なことから、それが具体的には何を表しているかを考える、つまり、具体と抽象を行き来することは、アカデミック・ジャパニーズで求められることの一つであろう。中級段階の独話の聴解で、この訓練をすることが可能である。

文の構造を表す言葉、具体的には「導入、本文、まとめ」「序論、本論、結論」といった言葉、そして、段落ごとの文章の中での機能、例えば、「問題提起、現状、定義、提案、解決法、展開、展望」などの用語、さらに、段落ごとに表している内容、例えば、「経緯、歴史、方法、形状、解説、変化」などの上位概念を表す語彙をここで導入するわけである。定義はいろいろなところに出てくるため、文の形としても導入しやすい。

また、解説の際、具体的な例を使うことが多い。具体的な例は説明するときに必要なものであり、聞いてわかりやすいものであるが、聞いたときにその具体例のみが耳に残り、何のためにその例が出されているか、ということまで考えないことも多い。示されている具体的な話は「例」であり、その例は何の説明のために提示されているかを考えさせる必要がある。具体と抽象の行き来の一つの形である。逆に、抽象的な概念が出されたとき、それは例えばどんなことを表しているかを考えさせることも重要である。

このような文章の構造、段落、用語などについては、読解での導入が一般的であると思われるかもしれないが、実は、この段階の聴解で効果的に導入することが可能である。それほど長くなく、きちんと構成されたものであれば、聞いただけで内容を理解し、記憶に残すことができる。いくつの固まり、いくつの話があったか、それぞれどんな内容であったか、などについて、むしろ理解したものを頭の中で再構成して、答えやすい。読解では、答えとなる部分を探して、その通り繰り返すことになりかねないが、聴解であれば、元の文の通りに繰り返すことは難しいので、理解できた内容を自分の言葉で述べることにつながりやすい。また、それを表現するために、まとめる言葉を探しやすいとも言える。この、まとめる言葉に当たる、上位概念の語彙を増やすことはこの時期の重要な練習であると言える。

この、文章の構成を表す語彙、段落ごとの機能を表す語彙、内容のまとめとなる語彙、それぞれに当たる用語を作り、提示した方が教育はしやすいと言える。ここでは、文章の構成を表す語彙を「構成」とし、内容のまとめを「概要」とする。さらに、内容をまとめたものを「内容」とし、表を作ってみる。この練習は漢字語彙を増やしていく中級で効果的であるが、抽象的な思考のできる、そして漢字語彙に抵抗のない学習者であれば、初級後半から可能である。

中級教材を使った文章の構成まとめの例を挙げる。

「経済のソフト化」『毎日の聞き取り 50 日』(中級)下 46<sup>ii</sup> (表 1)

### 2.1.3 スピーチ

教材の中には、独話でも「スピーチ」と言えるようなものもある。解説と近いものであるが、何かを伝えたいという話し手の意思を持ったものである。スピーチの場合、内容も大事であるが、その中で何を伝えたいかということを受け取ることも必要である。先の方法を使い、初級後半教材の構成まとめを作ってみる。

漢字系大学院レベルの学習者に対する教育で用いた例を示す。

表 1

構成	段落		内容
導入	問題提起		産業構造の変化→サービス産業の成長
本文	経済のソフト化	定義	知識、情報、サービスなどの価値が高まったこと
		具体例	部屋の掃除、情報雑誌、英会話学校など
まとめ	展開		社会全体での広がり

初級後半 Jブリッジ 4課 本田さん故郷へ帰る<sup>iii</sup> (表2)

表 2

構成	段落	概要	内容	具体例	データ
導入	自己紹介	ふるさととの関わり	どんな人：	高校卒業後ふるさを離れ、6年ぶりに帰郷、市役所に勤める	
本文	ふるさとの変化その1	環境	川の変化	昔：水がきれい、魚が捕れる 今：水が汚れる、魚が捕れない、泳げない	
		人口	減少	仕事がない→若い人が都会へ→人口減少	7万人から 6万2千人に
	変化その2	生活が不便	車がないと生活できない	買い物：スーパーは町の中心に一つ	
				娯楽：映画館は隣町	
				交通：電車は1時間に1本、9時まで	
	大変なこと	医療	病院	大きい病院がない	重い病気、 出産は隣町へ
教育		学校	減少(小学校10校から7校へ)	近くに学校がない 遠くまでバスで通う	
まとめ	気持ち	町が大好き	理由	自然が美しい、人が親切、助け合って生活	
		決意		この町を何とかしたい(変えたい)	このままではもっと悪くなる

ここでは初級後半ということで、「段落」「概要」などの言葉は幾分話し言葉に近い、初級段階でも理解しやすいものを使っているが、中級に向けて、抽象度の高い語彙をここで導入することが可能である。この表を見ると、実際に話されていることは「具体例」の部分になる。具体的な話をしながら、まとめると、だんだん左側の要素に移っていくことになる。このようにまとめてみると、このスピーチは自己紹介に始まり、町の変化を語り、そして、それに対する自分の気持ち、決意を述べている、ということが理解しやすくなる。自己紹介も町の変化や気持ちを述べるために必要な要素であることが理解できる。このように分析することで、漠然と聞いていたものが整理され、話し手の表現意図が理解しやすくなるのである。最終的に何が言いたいのか、何を伝えたいのかを理解するためにこの作業が必要である。先にも述べたように、具体と抽象を行き来することはアカデミック・ジャパニーズの理解面の重要な要素であると言える。また、表現するときにはこの逆の作業を行うことになる。言いたいこと、主張があり、それをどのように表現、構成するか、アウトラインを作っていく、それにあわせて実際の文章、表現を考えていくという行程である。理解面でこのような整理、分析をしておく、表現の際の指導にも役立つ。実際、表現指導の際、アウトラインがなかなかうまく作れない学習者がいるが、アウトラインの持つ意味が十分理解できていない可能性がある。まずは聴解、読解でアウトラインの持つ意味が理解できれば、表現にも生かせるであろう。読解でも同様の表を作る練習が可能である。

#### 2.1.4 調査、報告

教材の中には、調査をもとにしたもの、調査の報告が中心になっているものもある。このようなものの場合、調査の内容をレポート形式でまとめることができる。この場合大切なのは、調査の内容だけでなく、その調査自体の概要、調査者、調査対象などのいわば外側の部分である。これらは聞き逃すことも多いが、学習者が調査を行い、報告する立場になるとき、欠かせない情報となる。報告を聞く際にも重要なポイントとして、あげておきたい。また、調査の際の細かい数字等は先の固有名詞同様、データとしては必要な情報であるが、まとめる際にはわかりやすいように大きくまとめて示すことも必要となる。調査についての教材での表を示す。

『ニュースで学ぶ日本語 Part II』20 ミネラルウォーター<sup>iv</sup> (表3)

表3

	概要	内容
検査	検査者	全国の保健所
	検査場所	国内のメーカーや小売店
	検査対象	ミネラルウォーター 47万本
	結果	カビなどの異物が見つかった

以上、中級段階では、文章の重要な部分を取り出すこと、文章の構成を考え、それに相当する語彙を身につけること、話し手の主張を受け取ること、さらに、データの扱いについて指導することなどが、ポイントとなる。

## 2.2 上級

5分から30分程度の「ミニ講義」を教材にした場合、上級段階の学習者でも未習語があるため、細部まで完璧に聞くことはできないが、おおざっぱに全体を捉えることはできるはずである。この段階ではさらに語彙を増やして、聞き取れない部分を減らすこと、未習語を類推することで理解を助けることなどが必要であるが、そのほかにも難しいことはある。

この段階で難しいのは、背景となる知識を活用し、特に「明示されていない意見、含意をくみ取る」ことであると言える。また、細かな情報を聞き取りながら、たくさんある情報の中から中心となる主張がどれであるかをすくい取ることも必要である。「明示されない意見を聞きとる」「中心となる主張を捉える」「含意をくみ取る」というスタンダード「聞く」上級であげられている三つのスキルについて、実際に使った教材例から考えたい。

### 2.2.1「明示されていない意見を聞き取る」

テレビのニュース解説の中の専門家の解説の中で、学習者に理解されにくかったのは、以下のような明示されていない意見であった。使用したのは、「暮らしの中のニュース解説」の「ここまでわかった!温暖化の影響」<sup>v</sup>、上級レベルの聴解授業で使用した。この番組では、

- 1 平均気温が上がることによる全世界的な影響
- 2 3つのデッドライン
- 3 日本への影響
- 4 そのための対策



という大まかな内容で話が進んでいる。この中の「3つのデッドライン」の部分のスクリーンを以下に示す。

(解説者) 科学者の人たちに聞きますと3つのデッドラインがあるということなんですけど。

(アナウンサー) 3つのデッドライン。

(解説者) 一つがですね、1.5度のこのあたりですね。これは、EUヨーロッパの人たちとか、NGOがよく言うんですけど、90年より1.5度のところで食い止めよう。こういう現象も起きはじめのところで何とかなるだろうと、いうんですが、で、これはもうできないんじゃないかという科学者もいるんですね。

(アナウンサー) 間に合わないかもしれない。

(解説者) そうです。第2のデッドラインは、これはですね、先だっの洞爺湖サミットで福田首相が言った、福田ビジョン、がここなんですけど、2度なんです。これは、世界2050年温室ガス半減以上ということで、今、世界の先進国が目指そうとしているところなんです。これ、なかなかうまくまだいってない。(これも大変) 3つめのデッドラインはここですね。ま、ここになりますと、もう、こういう状況になってますんで、何が起きてるかわからない、非常に深刻な状況なので、ラインはもう、まずいんじゃないかと。これから先、この、福田ビジョンもですね、まだ世界的な合意に至ってない、と。新興国のインドとか中国、アメリカの調整もううまくいってない。合意に至ってないんですね。それから、コストの、これをやるためにはとてもたくさんのお金がかかる。もう少しこっちの方がいいんじゃないか、という意見も出ると思うんだけど、ここで起きている、こういうことと見比べて、ほんとにどこを着地点にするのか、ということを考えていかなければならない。できるだけこちらで。(早いほうがいいですよ、当然ね) 何が起きるかわからない。まあ、こういう状況ですよ。

ここでは3つのデッドラインを示し、「一つ目は今や不可能、3つめは困る、従って、可能で目指すべきなのは二つ目のデッドラインである、しかし、その合意もとれていない」つまり、二つ目のデッドラインが大切だ、ということを示している。

しかし、学習者は、これを聞き取ることが困難である。3つのデッドラインがあることは理解でき、その3つについて説明はできる。しかし、この中で解説者が主張している「二つ目のデッドラインの重要性」をつかむことは難しいし、また、その後の合意できない状況についての説明も何が言いたいかわかめない、という学習者が多い。明示されている解説はつかめるが、そこで本当に言いたいのは何か、という観点で聞くことがこの段階で求められているものであると言える。

この解説全体での解説者の主張は、「温暖化の影響は日本でも深刻であり、二つ

目のデッドラインに向けた対策が今すぐ必要である」ということであるが、この主張を捉えられることが、この段階で身につけるべき力であると言える。明示されていないが、全体からその意図をくみ取ることが求められる。

### 2.2.2 「多くの情報の中から大切な主張を聞き取る」

センター製作の教材「ミニ講義」のうち、最上級段階である「文学・枕草子」についての講義を例にとりて考える。同じく上級レベルの聴解授業での使用例である。

この講義は

- 1 作品の背景 成立時期、作者
- 2 作者について 聡明さを示すエピソード
- 3 本文解釈 文法等の説明も含む
- 4 作品の持つ意味

という構成で、約20分間と比較的長いものである。作品について、作者についての解説も詳しく、その知識がない学生にとっては、背景情報であっても、しっかり書き留めておきたいものであるようで、ノートを取らせると、この部分のノートがかなり詳しく書かれている。本文解釈の文法説明についても詳しくノートを取っている。しかし、講義者にも確認したが、この講義での一番の主張は「枕草子で作者の清少納言は、人が気づかない新たな美を発見し、提示した」ということである。この点について、講義の中ではそれほど強く主張されているわけではないが、この部分を伝えたくて、それまでの解説がなされていることが理解できる。学習者のノートを見ると、この部分についての記述がないもの、あっても取り立てられていないものが多く見られた。講義は細部も重要であり、最後の主張を支える知識として、情報もしっかりノートに取るべきものではあるが、主張を逃しては意味がない。この、講義者が伝えたいものをしっかり受け取る訓練が必要である。

### 2.2.3 「含意をくみ取る」

さらに、「含意をくみ取る」「話し手の意見、評価を予想して聞ける」について考える。ミニ講義「生物学」での「生態ピラミッドから見えてくること」の講義である。生態ピラミッドの説明の最後に「人間は何を食べるべき？」とスライドにあり、口頭の説明で、「草を食べると言っているわけではない、文化的なこともある。食物のことを考えるときに、生態ピラミッドで示されることも考えてほしい」という趣旨の話がある。その後、「海の生態系の中の鯨の位置」の話になり、3層のピラミッドの上位にいる「ひげクジラ類」と5層のピラミッドの最上位にいる「歯クジラ類」の話の後、「クジラを食べてはいけないのか」という問いがスライドにある。その後、

クジラを食べる話の時に、このような生態ピラミッドのことも事実として知っているべきだ、という趣旨の話で講義が終了する。講師の趣旨は、歯クジラ類は生態系ピラミッドの頂点にいたので、その下に何層もの海の生物がいる。歯クジラの保護を考えると、歯クジラが食べる大量の魚、プランクトンなどの生物がいること、従って、歯クジラが増えすぎるとは問題で、数を減らすことは悪いことではない、つまり食べてもいい、と取ることができる。しかし、講義の後、「先生は鯨を食べてもいいと思っているか」という質問をしたところ、「鯨を食べてはいけない」という自己の考えに基づいて、「食べてはいけないと思っている」と答えた学生と、「食べてもいいと思っている」と答えた学生とがいた。「食べてもいいと思っている」と答えた学生にその理由を挙げさせたところ、的確に答えた学生は少なかったが、講義者の口調や話の流れから、そのように理解し、講義者の意図をくみ取ることができたと考えられる。このように、明示されない意図、含意をくみ取るとはかなり難しいことである。持っている社会的知識や、話し手の口調、表情などから、考えの大筋、講義者の伝えたいことを理解する必要がある。それこそが上級学習者が身につけなければならないことであろう。

#### 2.2.4 上級での「聞く」こと

上級段階では、最終的なゴール「講義を聴く」に行く一歩前の段階として、母語話者の聞くものと同じもので、短いものを、場合によっては複数回聞くことにより、「わかる」ことが目標となる。その場合、わからない言葉があっても類推するなり、辞書で調べるなりすることができる必要がある。「わかる」ことは言っていることがすべてでなくとも、だいたい理解できることは必要だが、ここで求められているのはそれだけではない。スタンダードズ「聞く」で求められているように、流れをつかみ、段落分けができ、適切な見出しをつけ、例と主張を分けることができ、それが反映されているノートを取ること、そして、全体の要約を作ることができることが必要である。さらに上級段階では、明示されていない意図、含意が読み取れること、明示されていない主張がつかめることが求められると言える。

### 3 どのように訓練するか

「わかる」ということを以上のように考えると、その力をつけるための訓練を考える必要がある。そのためには、次のような練習が必要となる。

まとまった内容を持つ独話、解説を通して一度聞く

全体のテーマ

いくつかの段落に分かれているか(いくつかの話があったか)

それぞれの段落はどのような言葉でまとめられるか

各段落を、「導入、本文、まとめ」に分類するとどうなるか

それぞれの段落を短く一文で内容をまとめる

などをクラス全体で考え、前述のような構成表を作る。表が作れたら内容の理解はできたものと言える。この表を作るのに、クラス内でやりとりし、適切な表現を見つけながら考えさせる。時間がないときは、ここで要約を書かせることもできる。

この表が作れたら、その後、具体的な表現の練習となる。具体例の部分で、長い、具体的な表現を短くまとめることが要求され、それにふさわしい文章、さらには体言止めなどの表現も学ぶことができる。まとめた形と実際の表現を比べることで、どちらの表現についても練習ができる。だいたい理解できていること、自分なりの表現で伝えられることについて、正確な表現、より洗練された表現は何か、一文一文を正確に聞き取る練習をすることで、効果的に身につけることができる。また、文法についての確認もできる。そして、すべての音が聞き取れたことを確認するためにもう一度聞き、できれば、聞いた内容をスクリプトで確認する。こうすることで語彙、表現が定着し、音声の聞き取りも可能になる。繰り返すことでスピードにも慣れるようになる。

聞いた内容についてアウトラインを書く、ノートの形式にする、要約をまとめることもできる。さらに、理解した内容を口頭で再構成する練習も可能である。時間があれば、このモデル文を用いて、違う内容についての説明の形で表現練習も可能である。もちろん、聞いた内容についてのディスカッションもできる。ニュースなどでは、同じ内容の新聞記事を提示し、書き言葉と話し言葉の違い、観点の違いなどを確認することもできる。

上級段階で求められる「明示されない意見を聞きとる」「中心となる主張を捉える」「含意をくみ取る」については、まず明示されない意見がある可能性に注意を喚起する必要がある。また、常に講義者の主張を考えながら聞くこと、言外の含意をくみ取るべく、持っている知識の活性化、講義者の口調、表情などにも注意するなど、言語情報以外のものを活用する練習を繰り返し行うことが必要であろう。レジユメやパワーポイントなど視覚情報も同時に活用する練習も必要となる。

#### 4 評価

授業の最後には評価が必要である。スタンダードでもそのレベルに到達できたかどうかの認定が必要となっている。これまでの授業の中で、以上にあげたような力がついたかどうかについて、様々な試みを行ってきた。日本語能力試験などの客観テストでは文法、語彙といった要素的なもの他に、「聴解」「読解」といった理解系の技能の試験が通常行われる。口頭表現、文章表現などの表現系の技能は、客観的な評価をすることが難しい。一方、「聴解」「読解」ではできれば、客観的なテストが望ましいと言える。しかし、上にあげたような力を測るためには、客観テストだけでは十分とは言えない。

特に、上級段階においては、新しく考案した「聴読解」試験は、これまで行ってきた聴解だけの試験でなく、「スタンダード」で求められる「聞く」力をはかるためにある程度有効であることがわかっている。<sup>vi</sup>ただ、これまでに作成した「聴読解」試験は客観的な評価を目的としたため、すべて、選択式の解答形式とした。選択肢の中から選ばせるという形式は中級段階までの力を測るには適当であっても、上級段階の力を測ることは難しいと言える。段落のまとまりを上位概念で表す問題の場合、その概念を表す語をいくつかの選択肢から選ぶことは比較的容易であるが、実際に必要となるのは、その上位概念を自分で考え出すことである。中級段階までであればいくつかの中から選択する、という形式で理解しているかどうかを見ることは可能であるが、上級段階では自分でその概念を表す語を導き出すことが求められる。それは、選択式の解答形式からでは測ることのできない力である。話し手の意図をくみ取れたかどうかについても、いくつかの候補から選ぶことは容易である。過去に行った「聴読解」の試験では、上位概念を表す語を選択する問題は、上級段階の解答者ではほとんどが正解を選択し、差がつかなかった。自分でこの語を考え出すことができるかどうか、上級段階での力がついたかどうかを測る目安となるものである。

従って、上級段階では話のまとまりを上位概念の語を使ってまとめること、講義者のもっとも伝えたい話の中心部分を探し当てること、さらに話し手の意図をくみ取れたかどうかについて、口頭で、あるいは文章で表現させ、それを評価することが適当な評価方法であると言える。上級段階になると客観的なテストはなじまない。聞いた内容を要約させる、主張を書かせる、などをもって力を測る必要があると言える。

中級段階でも、先にあげたような構成表を作ることを授業中に繰り返して行えば、

試験でも同様の表を作ることでこちらの意図する理解ができているかどうかを測ることができる。所々をブランクにした表を作り、ブランクを埋めさせることで、ノートを取るのと同様に理解度を測ることができる。要約や表を書かせる試験の採点では、漢字、語彙、文法のミスは取らない方がいい。理解できているかどうかを測るわけであるから、理解できていることがわかれば、それでよしとすることにしたい。中級段階でも、正誤問題、選択問題などの客観的なテストのほかに、問いに対して答えさせる、要約を書かせる、構成表のブランクを埋めさせる、などの書かせる試験を行いたい。

## 5 おわりに

アカデミック・ジャパニーズでの聞く力、それを身につけさせるための練習、それを測るための評価について考えてきた。この考え方に沿った教材、試験の開発を今後も続けて行きたいと考えている。

## 注

- i 2009.3「JLC 日本語スタンダード 2009 改訂版」東京外国語大学留学生日本語教育センター
- ii 『中級日本語聴解練習毎日の聞き取り 50 日下』太田淑子他 1992 凡人社
- iii 『J.BRIDGE For beginners Vol.1』小山悟 2008 凡人社
- iv 『ニュースで学ぶ日本語 Part II』三井豊子他 1998 凡人社
- v NHK 総合テレビ、午後 1 時 5 分からの番組の中で放送されている「暮らしの中のニュース解説」2008 年 7 月 29 日放送の「ここまでわかった! 温暖化の影響」
- vi 坂本恵、中村則子、大木理恵 2009「上級聴読解試験の評価－学習者の聴読解能力を適正に反映する問題とはどのような問題か」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第 35 号